西照

西照寺寺報「さいしょう」 第36号
2018年10月9日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40
郵便振替口座　00780-8-8185　西照寺
西照寺ホームページ　http://nisitera.eek.jp

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講お勤めいたします
お参りくださいませ

おつとめの時間

十一月　六日（火）午後二時（逮夜）～
午後七時（初夜）～
七日（水）午前九時半（満日中）～

布教使　小島信師　射水市堀岡　聞光寺衆徒

※お斎（御膳）は六日逮夜のみで七日はありません

西谷山　西照寺

報恩講とは、どんな行事なのか

報恩講とは、宗祖親鸞聖人の御命日をご縁にお勤めする法座です。

親鸞聖人は、一二六三年一月十六日(弘長二年十一月二十八日)、九十歳にてご往生されています。この一月十六日(旧暦では十一月二十八日)が祥月命日にあたります。

聖人の亡くなられた日に、その恩徳を偲びお勤めをし、仏法に自らの生き方を学び直そうと集いがもたれました。この集いを「講」といいます。もともとは、親鸞聖人自身が、師の法然上人の御命日に、集いをもったことに由来があるようです。

一二九四(永仁二)年には、聖人の曾孫にあたる本願寺第三代の覚如上人が親鸞聖人の三十三回忌に際し、「報恩講私記」を著しそのお徳を讃えられています。このことから、その集いを報恩講というようになりました。当初は、毎月の命日にお勤めされていたようですが、本願寺第八代蓮如上人の頃から、年に一度祥月命日に合わせて七日間(七中夜)お勤めをする形式になったようです。これを「御正忌報恩講」といいます。

この本山で勤まる御正忌報恩講に全国の門信徒がこぞってお参りできるようにと、前もって、各末寺や各ご門徒の家庭でも報恩講が営まれました。それでも、なかなか本山にお参りできないということで、各末寺でも御正忌報恩講が勤められるようになりました。

ですから、報恩講とは、直接的には親鸞聖人の「ご恩に報いる集い」ということになります。聖人の生き方を通して、私自身の生き方を確かめ見直す大切な日です。

先人は、この浄土真宗教団の根幹をなす最も重要な報恩講の仏事を、七百年を超える長い歴史を通して、脈々と受け継ぎ今日まで大切にお勤めしてくださいました。

親鸞聖人の御恩とは何か

それは私の「いのち」の真実を明らかにし、阿弥陀如来の願いと救いに、私の生きる意味と死を乗り超えていく方向を指し示してくださったことにあります。

そもそも釈尊は何に目覚めたのでしょうか。

雑阿含経巻十二には『この縁

起の法・道理は、その法を覚証する如来(仏)が世に出ても出なくとも常住であり法住（まことととして定まっているもの）』であると書かれています。私の与えられている命の事実を「縁起」という言葉で、表現してくださいまして、それが真実であると言われます。縁起とは、因縁によって生起しているという言葉の略語です。一切の存在は、あらゆるものが相互に依存し関係し合い、つながっている。それらが、無数の原因と条件によって（因縁）、仮に依り集まってものを成り立たせている（生起）。そして、時がたてば、条件が変われば違うかたちになっていく。永遠不滅のようなものは存在しない。常に消滅変化を繰り返しているということです。

言い方を変えると命というのは自分のものではなくて、（自分以外の）いろんなものが仮に寄り集まって成り立っている。自分のものではありませんから、自分の思うたようにはならないということです。

ところが私は、与えられている命を自分のものだ、自分の命だとしか思えていません。

今、私の命を「生・老・病・死」と表現しますと、これは私の一生です。その中で「生」に対して「死」、「老い」に対して「若い」、「病気」に対して「健康」を分けてみます。本来の命の事実からすると、生も老も病も死も、どれが良いとか悪いとかなく、共にどの状態であろうと百点満点の命を生きています。しかし、私は「若い」とか「健康」とか「長生き」することが、幸せだ喜びだと思って、それを求めて日暮らしを送っています。「老い」や「病気」や「死」は、マイナス点であり、不幸のどん底のようにしか見れませんから、そこに苦しみや悩みを感じる私がいます。

釈尊は、与えられている命を自分の都合の良いようにしたいという「我執」の見方こそが問題であり、苦しみの元であると気づいてくださいました。

雑阿含経七五三経には、(比丘)『尊師よ、不死、不死と言われますが、尊師よ、何が不死なのですか。何が不死に至る道なのですか』。(仏陀)『比丘よ、およそ貪欲(むさぼりの煩悩)の滅尽、瞋恚(いかりの煩悩)の滅尽、これが不死と言われる。この聖道こそが不死（涅槃）に至る道である』と書かれています。与えられている縁起なる命を自分の我執煩悩でしか見れない。その我執煩悩の見方から解放され（縁起そのままに生きれる）ことが、死を乗り超えていく道（不死）であり涅槃に至る道であると言われます。

ですから、仏法を聞かせていただくということは、一義的には、病気が治ったり、若くなったり、長生きをする （裏面へ続く）

（中面からの続き）ということではありません。それが素晴らしいことで幸せだという見方（我執煩悩）から、解放されることによって苦悩から救われるということなのです。

縁起がかたちを現す

縁起ということは、生きとし生けるものは、どこかでつながり関係し、支え合っているということへの目覚めを促します。

親鸞聖人の言葉でいえば、『一切の有情はみなもって世々生々の父母・兄弟なり』（歎異抄第五章）ということです。命のあるものはすべてみんな、これまで何度となく生まれ変わり死に変わりしてきた中で、父母であり兄弟・姉妹であったという、つながりや関係への気づきです。

私でも、知らないところ所へ行って全然関係のない人と思っていた人が、私と関係する人だと分かると急に親しみを覚えたり、困っていることがあれば親身に何かしてあげたいという思いに駆られることがあります。

親鸞聖人

縁起の法に目覚めた釈尊は、すべてが親兄弟のようにつながっているというその奥底に、我がことのように困っている者を助けたい。迷っている者を目覚めさせ救いたいという、はたらきを感得されたように思います。そのはたらきが、私たちに分かるように、かたちとなって、人格的表現なって現れた方が阿弥陀様であると親鸞聖人は教えてくださいました。

ですから、阿弥陀様という方が西方浄土におられて、私を救って下されるといういただき方も大切でありますが、それは同時に、私の命の事実に宿っているはたらきを阿弥陀と名付けたという言い方もできるかと思います。

阿弥陀様はすべてのものを救いたいと願われています。このすべてのものを救いたいという願いは、私の命の事実である縁起そのものの願いであるともいえます。

そして、その願いを念仏に込めて、これは本当はあなたの願いではなかったのですかと、私に届け呼びかけてくださっています。

親鸞聖人は阿弥陀如来の願いの中に、私の生きる意味と方向を指し示してくださったのでした。（文責　住職）